

文學と消憂

——魏晉時代まで——

釜 谷 武 志

神戸大學

西晉の陸雲が兄の陸機に與えた三十餘通の書信には、文學の創作や受容についての興味深い評論が展開されている。^①

ほぼ同じ頃に著された陸機の「文賦」が、深い思索に基づく文學論を彫琢を凝らした文體に包んでいるのと對照的に、肉親に對する氣安さも手傳つてか、陸雲はより口語に近い文體で自らの考えを述べている。「文賦」が完成された形としての文學論であるとすれば、一連の書信は完成にいたるまでの過程を示してくれたもの、俗なたとえを持ち出せば、材料をいかに料理してごちそうをつくるのか、目下調理中のその厨房を覗かせてくれたものであるといえよう。本心に近い部分がより多く含まれると考えると、よいのではないだろうか。

その中に、文學によって憂さを晴らすという表現がいくつか見える。たとえば、次の通りである。

——久しく復た文を作らず、又た復た文章を視ず、都べて自ら次第無し。文章は既に自ら羨む可く、且つ愁を解き、憂を忘るるも、但だ之れを作ること工ならず、勞を煩わせて力を棄つ、故に久しく意を絶つ耳。

——愁邑して忽ち復た文を作らんと欲す。前を定めんと欲し、功夫を用いるに於て、大小の文了[※]わるに隨いて、爲に以て愁を解く。

——雲は久しく意^②を文章に絶つも、前日教くせらるるに由りての後、文を作りて愁を解く。聊か復た數篇を作り、爲に復た爲る所有りて以て憂を忘れんと欲す。

最初の例は、文學作品が慕わしいものであるばかりか、憂愁を解消する手段にもなりうるもの、陸雲自身はなかなか優れた作品が作れなくて勞のみが多いので、しばらく遠ざかっていたことを述べる。愁を解く手段としては、作品を作ることのみならず、讀むことも含むのかもしれないが、二番目の例は、作品の創作もしくは以前に書いた草稿の推

敵を指しているし、三番目のは明らかに作ることで愁を解こうとしている。文學創作によって憂愁を解消しようとするのは、現代のわれわれから見ると、さほどめずらしくないかもしれないが、當時においてはどうであったのか。本稿では、かかる考えがどのようにして生まれてきたのかを見ていきたい。

なお、題には「消憂」と記したが、陸雲の例に「解愁」、「忘憂」とあるように、憂愁の解消を意味する表現にはさまざまなバリエーションがある。金文資料にすでに「憂」の字は見えるが、「愁」は見あたらなから、來歴としては「憂」の方が古いのかもしれない。索引類で検索する限り、先秦の文獻でもたとえば『詩經』、『尚書』、『論語』、『孟子』などにおいて「憂」の用例はあるが「愁」はないし、「愁」が見られる『莊子』でも用例数は壓倒的に「憂」が多い。「愁」は後に目的語をともなつて、「……を愁えしむ」という句形になることが相對的に多いのも相違点のひとつであるが、『説文解字』で「憂は愁なり」「愁は憂なり」と互訓の形をとっていること、段玉裁が古音では同じ部に

屬すと考えていることなどから、基本的にこの兩字を同義に扱った。^③

* * *

まず、文學作品の創作によるという限定をはずして、憂愁そのもの、もしくはそれを解消するということの例を、過去にさかのぼって見てみよう。「消憂」でわれわれが思いつくのは、王粲の「登樓賦」の冒頭——「玆の樓に登りて以て四望し、聊か日を暇りて以て憂を銷^けさん」である。戦亂の世にあつて永く故郷を離れた王粲は、「情は眷眷として歸らんことを懐い、孰か憂思の任う可き」としてこの樓に登り、遙かかなた故郷の方を見やつて、ゆったりとした時間を過ごすことで、憂いを晴らそうとする。だが、結局は「心悽愴として以て感發し、意怊怛として慚惻す。増除に循いて下降し、氣は胸臆に交憤す」のごとく、憂愁は消えることのないまま樓を降りてゆく。高みに登つて文學作品を作ろうとするのは、よく知られているように「高きに升りて能く賦す……は、德音有りと謂う可く、以て大夫と爲る可し」(『詩經』定之方中の毛傳)の考えの延長線上に位

置する。しかし、高い所へ登ることで憂いを晴らそうとするのと類似した行爲は、すでに『詩經』の詩に見いだすことができる。

我思肥泉 我は肥泉を思い

玆之永歎 玆に之れ永歎す

思須與漕 須と漕を思えば

我心悠悠 我が心は悠悠たり

駕言出遊 駕して言に出遊し

以寫我憂 以て我が憂を寫うつかんとす

(邶風・「泉水」第四章)

小序によれば、衛の國から嫁いできた夫人が故國に里歸りしたいと思つたが、それは父母の生存中にしか許されず、父母が死んでいて願いがかなわぬ彼女はこの詩を作つて氣持ちを表したという。肥泉は同じ所から出て分かれて別の所へ流れてゆく水で(毛傳)、この夫人の境遇を暗に示している。故國衛にある須と漕の地を思うと、心は憂いに満ちる。そこで馬車をしたてて出かけ、憂愁を除こうとするのである。鬱屈した胸の内を晴らすべく野外に出るのは、

高みに登つて憂いを消そうとするのと共通項をもつ。水平方向と垂直方向の違いこそあれ、實際に今いる場所から離脱すること、現状の打開を圖る點において。

④ 衛國から嫁いできた女の憂いといへば、邶風・「竹竿」の詩もそうである。他國に嫁いだものの、夫からは好遇されず、故國に歸りたいと思う女の氣持ちを歌つたとされる詩の第四章は、次の通りである。

淇水滌滌 淇の水は滌滌とながれ

檜楫松舟 檜の楫に松の舟

駕言出遊 駕して言に出遊し

以寫我憂 以て我が憂を寫かんとす

故郷の衛を流れる淇水に、檜(柏の葉で松の幹をした樹木)の楫をつけた、松の木の舟が浮かぶ。毛傳は、舟と楫によって、仲のよい夫婦をたとえていふとする。そのような衛の國に歸りたいが歸れないので、せめて馬車で出かけて憂愁を解こうとするのである。末尾の二句は先の「泉水」の最後と同一の表現である。毛傳は、出遊するのは衛に向かう道 pensando である、と注し、鄭箋は、この憂いを除くの

はただ歸ることによってだけである、という。故國を思つてその方角へ續く道に車を走らせ、少しでも故郷に近づいて、憂いを減少させようとするのは、高所に登りせめてなりとも故郷の方向を望んで、憂いを消そうとするのと類似している。

『論語』述而篇によると、葉公から孔子の人となりを尋ねられたが答えなかつた子路に對して、孔子はなぜ「憤りを發して食を忘れ、楽しんで以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らざるのみ」と答えなかつたのか、と言つた。「樂以忘憂」は、自分の熱中できることを充分に楽しんで憂いを忘れるの意であろうが、思うに『論語』では、「憂」は「樂」と對極に位置して、仁者にとって樂しむことは大いに推奨されるものの、「憂」は慎むべきことであつたようだ。あるいは、憂えることがないようになって始めて君子と言えるのである。「子曰く、知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず」と（子罕篇）であるし、「子曰く、君子は憂えず懼れず」と（顔淵篇）である。だからこそ、顔淵は「一簞の食、一瓢の飲、陋屋に在り。人は其の

憂に堪えざるも、回や其の樂しみを改めず、賢なるかな回や」（雍也篇）と、賞賛されるのである。

普通の人間が憂愁から離れられないとするのは、『莊子』においても同様である。「不知なれば、人は我を朱愚と謂い、知なれば反つて我が軀を愁えしむ。不仁なれば則ち人を害い、仁なれば則ち反つて我が身を愁えしむ。不義なれば則ち彼を傷い、義なれば則ち反つて我が己を愁えしむ」（庚桑楚篇）と、知・仁・義のせいがかえつてわが身が憂愁に陥ることを述べるのは、儒家的な考えに對する反駁を含むのだろうが、「人の生くるや、憂と俱に生く。壽者は悟悟として、久しく憂えて死せず、何ぞ之れ苦しきや」（至樂篇）と、人間の一生が憂愁から逃れられないことを説くベシミスティックな語調は、後の「古詩十九首」の「生年は百に満たざるも、常に千歳の憂を懷く」と重なりあう。

*

*

先秦の書物の中で憂愁にふれるものは少なくないが、その頻度と重要性の點でやはり何といつても『楚辭』に指を屈するであろう。

背夏浦而西思兮 夏浦に背きて西に思い

哀故都之日遠 故都の日びに遠ざかるを哀しむ

登大墳以遠望兮 大墳に登りて以て遠望し

聊以舒吾憂心 聊か以て吾が憂心を舒ぶ

(九章・「哀郢」)

ここは、大きな堤防に登って遙か都の方を望み、憂いの心を慰めようとする。^⑥

吾將蕩志而愉樂兮 吾は將に蕩志して愉樂せんとし

遵江夏以娛憂 江夏に遵いて以て憂を娛しまし

む

……

……

吾且儻侗以娛憂兮 吾は且く儻侗して以て憂を娛し

ませ

觀南人之變態 南人の態を變ずるを觀ん

(九章・「思美人」)

王逸が「吾將蕩志而愉樂兮」の句に注して「我が憂愁を濼い弘く佚豫するなり」と述べているように、長江や夏水の流れに沿って行き、憂さを晴らそうとするのである。「吾

且儻侗以娛憂兮」も、ひとまずぶらぶらして憂愁を解こうとすることだろう。右に擧げたのはほんの一例で、同類の表現は『楚辭』にきわめて多い。そもそも屈原が「故に憂愁幽思して『離騷』を作る。離騷とは、猶お離憂のごときなり」(『史記』屈原賈生列傳)とされる以上、屈原と結びつけて理解される『楚辭』に「憂愁」が多いのは理の當然と言わねばならない。

九章・「抽思」の亂に次のような表現が見える。

道思作頌 道に思いて頌を作り

聊以自救兮 聊か以て自ら救く

憂心不遂 憂心遂げず

斯言誰告兮 斯の言誰にか告げん

道中、故郷への思いを頌に表して、自らの心の結ばれを解こうとした。しかし憂心は解けることがない。この言葉を告げる相手もない。これによると、頌つまり「抽思」などの作品を作ることによって、憂愁を解消しようとしているわけである。陸雲のいう文學創作による消憂は、ここに源を發するのだろうか。確かにこのような作品の創作が憂

いの慰めになることを認めているが、それは憂いを言葉に表現することで、その憂いを共有する人々の存在を確認するという側面があり、創作によって積極的な消憂を圖る段階とは、まだやや開きがある。^⑦

この他に、「欲酌醴以娛憂兮、蹇騷騷而不釋」（九歎・「遠逝」）は、酒によって憂いを解こうとするが解けなかったというし、「願假簧以舒憂兮、志紆鬱其難釋」（九歎・「憂苦」）は、樂器の演奏によって解こうとするが解きがたいといい、酒や音楽が消憂の手段として擧がっている。ただ、九歎の作者は前漢末の劉向とされていて、そうだとすれば、これらはむしろ漢代に普遍的な考えかたの反映といえよう。なお、司馬相如「長門賦」の序に「（陳皇后は）黄金百斤を奉じて、相如・文君の爲に酒を取り、因りて悲愁を解くのを于らしむ」とあり、陳皇后の憂愁を解くために、代わりに司馬相如がこの作品を作ったことになるが、顧炎武などが指摘するように、この賦は偽作の可能性が大である。むしろ、憂愁を解くために代わりに作品を作るという考えの出てくる時期が分かれば、逆に作品の制作時期がある程度

文學と消憂（釜谷）

推測できるかもしれない。

よく知られているように後漢の文學には憂愁と關わるものが實に多い。張衡「四愁詩」や繁欽「愁思賦」は、題名に愁の字をもっているし、繁欽「弭愁賦」などは、文字通り愁いを止める賦である。樂府古辭でも「何を以てか憂を忘れん、箏を弾じて酒歌せん」（「善哉行」）、「美酒を醸し、肥牛を炙り、心に懼ぶ所を請い呼びて、用て憂愁を解く可し」（「西門行」）のように、飲食、音楽などで憂愁を解消しようという表現がある。そして、文學作品が憂愁と最も大きな關わりをもつのは、おそらく『楚辭』の系譜に於ける作品においてであろう。王逸が班固の『楚辭』理解に反發してであろうが、「屈原は忠を履みて譖を被り、憂、悲、愁、思し、獨り詩人の義に依りて『離騷』を作り、上は以て諷諫し、下は以て自慰す」（『楚辭章句序』）、「憂、心煩亂し、愬うる所を知らず、乃ち『離騷經』を作る」（『離騷經序』）、「呵して之れに問い、以て憤懣を渫え、愁、思を舒瀉す」（『天問序』）のごとく、作品を作ることによって屈原が胸中の憂愁を解消した、と述べるのは、『楚辭』解釋の方向を決定

的にしたと同時に、後漢から魏晉にかけての文學の基調をいっそう鮮明にしたといえよう。

三國になると「消憂」を表す語はさらに多くなる。曹操の「慨して當に以て懐すべし、憂思忘れ難し。何を以て憂を解かん、唯だ杜康有るのみ」(「短歌行」)は酒によって憂いを解こうとするし、王粲の「客子悲傷多く、涙下りて收む可からず。朝に譙郡の界に入れば、曠然として人の憂を消す」(「從軍詩」)は、憂いが消えたという表現で、譙郡の統治者つまり曹操を間接的に賞賛している。曹丕の「書疏往返すと雖も、未だ其の勞結を解くに足らず」(「吳質に與うる書」)は、書信のやりとりだけで實際に顔を會わせられないため、心の結ばれは解けないことをいい、同じく「誰か能く憂を懐いて獨り歎ぜざらんや。詩を展べて清歌し聊か自ら寛くするも、樂は往き哀は來たりて肺肝を推く」(「燕歌行」)は、詩や歌によってゆったりくつろぐとうるが、かなわなないことをいう。後者の「展詩」は、詩を作ることと理解できなくもないが、詩を読む方向にとるのが妥當であらう。

このようにいわゆる建安文學には、憂いを消す表現が少なくないが、なかでも多いのが曹植である。「絃歌して思いを蕩あちうも、誰と與にか憂を銷さん」(「朔風詩」)は、樂器や歌で一時的に憂いを拂うことはできても、共にいるべき人がいない以上、根本的な消憂は圖れないの意であらう。

賦に目を轉ずれば、「風人の歎ずる所を誦して、遂に駕して言に出遊す。北園に歩んで馳騫し、翱翔して以て憂を解かんことを庶う。……且く容與として以て觀を盡くし、聊か日を永くして愁を忘れんとす」(「節遊賦」)、「高塘に登りて以て望を永くし、日を消して以て憂を忘れんことを冀う」(「感節賦」)などがあり、郊外へ出て憂いを消そうとする點で、王粲の「登樓賦」や「雜詩」と共通する所が大である。「誦風人之所歎」はもちろん前に引いた『詩經』の「泉水」などを指す。こうした詩賦の一節に見られるだけでなく、憂愁をテーマとした作品も曹植には存在する。

「絃愁賦」と題する作品は、附せられた序に「時に家に二女弟あり、故の漢の皇帝聘して以て貴人と爲さんとす。

家母は二弟の愁思するを見、故に予をして賦を作らしむ」とあり、後漢の獻帝に嫁ぐことになって憂いに沈んでいる二人の娘を見た母が、兄の曹植にこの賦を作らせたことが知られる。今に傳わるのは作品の全部ではないかもしれないが、この賦では二人の妹が一人稱になっており、曹植が妹の立場になって書いたわけだから、作品化することで憂愁が少しでも和らぐと考えられていたのではないだろうか。ちなみに「長門賦」は、陳皇后の憂愁を解くために、代わりに司馬相如が作ったことになっていた。「思いを釋く」という「釋思賦」は、殘缺であるが、弟が家を出て族父の後を嗣ぐことになったので、「心に戀然たる有り、此の賦を作りて以て之れに贈る」(序)といい、ここは憂愁ではないが、賦をつくることで思いを釋こうとしたのである。また「九愁賦」は、その「九」からも察せられる通り、自らを屈原になぞらえて半生を回顧し、愁いを述べたものである。

さらに「愁いを釋く」という「釋愁文」は、「予」と「玄虛先生」との假構の對話形式を用いた、いわゆる設論の文

體である。

予は愁慘を以て、路邊に行吟す。形容枯悴し、憂心醉えるが如し。玄虛先生有り見て之れに問いて曰く「子は將た何を疾みて以て斯に至れるか」と。答えて曰く「吾が病める所の者は、愁なり」と。先生曰く「愁は是れ何れの物にして、能く子を病ましむるか」と。

右のように、屈原を彷彿とさせる人物の登場で始まり、その「予」を悩ませている愁について、「愁の物爲るや、惟れ惚惟れ怳、召さずして自ら來たり、之れを推せども往かず。之れを尋ねるも其の際を知らず、之れを握るも一掌に盈ちず。寂寂たる長夜、或いは群し或いは黨し、去來するに方無く、我が精爽を亂す。其の來たるや退き難く、其の去るや追い易し。餐に臨んでは哽咽に困しみ、煩冤しては酸嘶に毒しむ」と説明する。さらに續けて、そのために、化粧しても色つやはよくならず、ごちそうを多く攝つても太らず、溫熱療法でも消えず、膏藥を用いても和らぐことなく、美人を見ても悦ばず、音楽を聴いてもかえって悲しくなり、名醫も手の施しようがないという。では、玄虛先

生はいかに處方するのか。先生の診斷によれば、「子は末季に生まれ、流俗に沈溺し」て、名利を求めぬがゆえに、「正氣を潤損し」たのである。そこで先生が贈るのは「無爲の藥」であり「澹薄の湯」である。「莊生は子の爲に養神の餌を具え、老聃は子の爲に愛性の方を致さん。遐路に趣いて以て棲迹し、輕雲に乗りて以て翱翔せん」と言い、かくして「衆愁は忽然として、辭せずして去る」のである。つまりは道家の養生による釋愁である。思想的な問題はしばらく措くとして、消憂がこのころの文學の大きなテーマになつていたことは確かである。

* * *

陸雲がいうところの文學による消憂は、陸機の文にも見える。「愍思賦」の序で「予は屢しば孔懷の痛を抱くに、奄ち復た同生の姉を喪い、恤を銜み哀傷す。一載の間に、喪制便ち過ぐ、故に此の賦を作りて、以て慘惻の感を紓く」というのは、「愍思賦」を作ることと姉の死を悼む氣持ちを解こうとしている。ただこれまで擧げてきた消憂の例は、あくまでも憂愁をテーマとする作品を作ることで、その憂

愁を解こうとするものである。作品の内容いかんにかかわらず、書くことが消憂につながるというのは、やはり陸雲の書信に始まるのであろうか。そして陸機の「文賦」の一節に「伊れ妓の事の樂しむ可きは、固より聖賢の欽む所なり」と、古來の聖賢が文學作品を制作することの樂しみを重視してきたことを述べるのは、創作の樂しみに言及する點で、陸雲の「作文解愁」などの説と共通すると、たとえば錢鍾書氏は指摘する^⑧。兩者が同じ意味あいを使われているか否かについては、若干議論の餘地があるかもしれないが、西晉のこの時期に、創作によつて憂愁を解こうという積極的な考えが廣がついていたことは、想像に難くない。

その背景には、右に見てきたように、『楚辭』の受容に代表される漢代以降の憂愁の文學の系譜が指摘されよう。左芬が晉の武帝の「詔を受けて愁思の文を作るに、因りて『離思賦』を爲」(『晋書』后妃傳上) ったことなどから、當時は悲愁の情を樂しむことをよしとする美的感情がかなり廣がついていた^⑨、といわれるが、おそらくそれは晉になつてからではなく後漢から連綿と續いてるのであろう。憂愁

をテーマとする作品を書いて憂愁を解消しようとするのは、明らかかな記述に限っただけでも、後漢以降多く見られる。文人たちはそうして憂いを解いてきたのである。しかし、それを明確に意識するのは魏晉になってからのことであろう。『詩經』泉水の詩は、憂いを解くべく郊外に行ったのだが、それでもなお解けなかったから、その思いを詩で表現したわけで、結果として詩の制作が消憂に少しは效用があったことになる。しかしながら、作品の制作で消憂していることと、その意義を認識することとは同じでない。

錢鍾書氏は先に引用した所で、曹植の「丁敬禮に與うる書」の「故に興に乗じて書を爲る。欣びを含んで筆を乗り、大いに笑って辭を吐く、亦た歡びの極みなり」を引かれる。書信のやりとりで相手との對話を楽しんでいるのだらうから、相手が誰でもかまわないわけではなく、ある特定の相手を想定しなければ楽しみにはならないが、その前提のもとでいうと、これも廣い意味で書くことによって楽しんでいくことになる。

陸雲以降、たとえば『文心雕龍』の養氣篇で、精神を使

文學と消憂（釜谷）

うことについては少しふれるが、それはよい作品を書くには精神をすり減らしてはいけないという考えであって、文學によって心の結ばれを解こうという説は見られない。これはなぜであろうか。にわかに結論は出せないが、書信と論著という違いも一つには作用しているのではないだろうか。親しい相手を読み手とする書信であればこそ、かなり本音にふみこんだ内容も記すことができる。「伊茲事之可樂」と文學創作の楽しみに言及した陸機の「文賦」はむろん書信ではないが、これはやや抽象的な表現であり、片や曹植の「丁敬禮に與うる書」からは具體的に、書くことの喜びが伝わってくるのではないか。錢氏はまた何遜『春渚紀聞』卷六の「東坡事實」を引用されている。「先生嘗て劉景文と先子とに謂いて曰く『某し平生快意の事無きも、惟だ文章を作る。意の到る所あれば、則ち筆力曲折し、意を盡くさざる無し』と。自ら謂えらく、世間の樂事に此れを踰ゆる者無し、と」。宋代の考えと同日に談ずることはできないにしても、蘇東坡が口頭で述べているように、こうした問題はより日常性の強い場において披瀝されやすいので

はないか。そうだとすれば、文學創作によって憂いを解消するという問題は、記録される機会が少ないだけで、もっと廣く人々が意識していたのかもしれない。

注

① 拙稿「陸雲『兄への書簡』——その文學論的考察——」(『中國文學報』第二十八冊、一九七七年)、佐藤利行「二陸の文章觀」(『日本中國學會報』第三十七集、一九八五年)、同「陸雲研究」(白帝社、一九九〇年)などを参照。

② 「意」を『陸士龍文集』は「音」に作るが、張溥本に従った。

③ 憂は憂の本字である。この他にも「鬱」「悒」「患」など類義の字は多くあるが、必ずしも考察の対象には入っていない。

④ 王粲「登樓賦」は高みに登って憂いを晴らそうとするが、同じ王粲の「雜詩」では「日暮れて西園に遊び、憂思の情を寫かんことを冀う」のように水平方向の移動で憂愁を取り除こうとする。なお、李商隱の人口に膾炙した詩「樂遊原」の「向晚意不適、驅車登古原」も、晴れない心ゆえに郊外に出かけ、そして高みに登るわけであるから、基本的には同じ構造であろう。

⑤ 『左傳』昭公二十八年に、魏子が伯叔から聞いた話として、「唯だ食のみ憂を忘る」という諺を載せている。これは積極

的な消憂の手段ではないかもしれないが、結果として食事中はしばし憂愁を忘れることをいう。

⑥ これも王粲「登樓賦」の冒頭部分の先蹤とみなすべきであろう。

⑦ 「この定式は、藝人たちが育てた初步的な文學理論と言うよりも、より廣い人間關係の中での自己の位置づけの意味を考えたものと見ることができよう」(小南一郎「楚辭」、筑摩書房、一九七三年、一九二頁)。

⑧ 『管錐編』(中華書局、一九七九年)一一九二頁。

⑨ 王運熙・楊明『魏晉南北朝文學批評史』(上海古籍出版社、一九八九年)一一二頁。

なお『後漢書』五行志一に、桓帝の元嘉年間(一五一—一五二)、都の女性の間で「愁眉」や「啼粧」などの憂愁を表現した化粧が流行し、「京都は歎然とし、諸夏は皆な放效」つたとある。こうした社會の好尚と文學との關係も、視野に入れなければなるまい。